

インタビュー

インフォメーション・フルーエンシーとは何か

— ニューヨーク市教育庁図書館サービス・ディレクター バーバラ・ストリップリング氏に聞く —

What is the Information Fluency?

村上 郷子

MURAKAMI, Kyoko

はじめに

2007年10月22日(月)、著者は、ニューヨーク市教育庁図書館サービスのディレクター (Director of Library Services, The New York City Department of Education) であるバーバラ・ストリップリング (Barbara Stripling) 氏に会い、ニューヨーク市の学校図書館の現状やスクール・ライブラリアンの職務、および氏が提唱する「インフォメーション・フルーエンシー」の概念についてお話を伺った。ストリップリング氏は、長年教諭として英語や演劇を教えるかたわら、幼稚園から高等学校までの学校図書館メディア・スペシャリスト、テネシー州のチャタヌーガの図書館最高責任者、そしてアーカンソー州フェーエットビル公立学校の教育方法のディレクターとして活躍してこられた。氏は、元アメリカ学校図書館協会の会長であり、現在全米図書館協会理事会の委員でもある。

ストリップリング氏は、2002年頃から「インフォメーション・フルーエンシー」という概念を提唱している。ニューヨーク市教育省のホームページによれば、「インフォメーション・フルーエンシー」は、スクール・ライブラリアン、メディア・スペシャリストおよびティーチャー・ライブラリアンと、教員や児童・生徒たちが協働して、日常生活に関わるさまざまな情報を円滑に分析・検索し、発信することにより、児童・生徒たちの学力向上につなげようとする考え方である。同時にスクール・ライブラリア

ンと教員との協働 (コラボレーション) の実際についても伺った。

村上: 私たちは、昨年 (2006年11月) 第161小学校のメディア・スペシャリストであるピーター・コーニッカ先生から、「インフォメーション・フルーエンシー」という概念を紹介してもらいました。非常に面白い概念だと思いましたので、ニューヨーク市のホームページにある「インフォメーション・フルーエンシー (IF、以下「IF」と省略する) に関する情報も読ませて頂きました。私たちは、このインタビューでIFという概念がどのような経緯でつくられたのか、その背景について詳しく知りたいと思いますので、そこのところを詳しく教えてください。よろしくお願いします。

ストリップリング: もちろんです。まず、私自身のこれまでの経緯についていくつかお話ししましょう。ニューヨーク市には、およそ3年前に来ました。基本的に、私は、これまでこれからもスクール・ライブラリアンですが、今はこの仕事 (ニューヨーク市教育庁図書館サービスのディレクター) についています。

スクール・ライブラリアンの職を通じて分かったことは、教えるべきインフォメーション・スキルのカリキュラムが十分に定義されていなかったために、スクール・ライブラリアンたちは、何を教えていい

キーワード: インフォメーション・フルーエンシー、学校図書館、ニューヨーク市、コラボレーション
Key words : information fluency, school library, The New York City, collaboration

のかよく理解していないという現状でした。そのため、私が最初に行った主な仕事は、どのようなインフォメーション・スキルが必要とされているのか、またどのようなインフォメーション・スキルを子どもたちに教えるべきか、その基準を定めることでした。このような地道な作業を経て、児童・生徒たちが必要とする特定のインフォメーション・スキルとは何かを定義していきました。

また私たちは、子どもたちが卒業して社会に出るまでに、情報を確実に理解し、自分なりの結論を導き出せるようにして欲しいと思いました。

ですから、幼稚園から12学年（高等学校3年）まで段階別に一連の基準を設けようと思ったのです。子どもたちは、一朝一夕で情報活用の達人にはなれませんからね。インフォメーション・スキルを身につけることによって、子どもたちが高校を卒業する前には、情報を正しく理解し、自分で情報を選択・評価できるようになります。

インフォメーション・スキルの次は、インフォメーション・フルーエンシー（IF）の定義付けに着手しました。インフォメーション・リテラシー（IL）の能力というよりは、IFのスキルを磨いて欲しいと思いました。ご存じのように、インフォメーション・リテラシーは、学校図書館の領域ではよく知られている概念です。それを承知の上で、私は、子どもたちには単なることばや知識以上のものを学んで欲しいと思ったのです。

私たちにとって、読み書きができる（to be literate）ということは単に知識のかけらを知っていることにすぎません。ですが、フルーエント「なめらかな」（to be fluent）という意味は、どのような形態からの情報であろうと、学校や職場など、どこで情報を見いだそうと、個人的・学術的な情報であろうと、誰もが納得できるような情報活用のノウハウを使うことができるのです。

ですから、単にある情報について知っているというだけではなく、さまざまな情報に含まれている「情報」以外の行間を理解する能力なのです。私は、子どもたちが情報と向かい合うときはいつでも、「なめらかな」であって欲しいと思うのです。そうすれば、子どもたちは情報を理解し、情報をよりうまく取り

扱うことができるでしょう。

IFの基準をつくるために私たちが最初にしたことは、ライブラリアンたちのグループを一堂に集めて、1週間ほどライブラリアン専門職育成についての徹底的なワークショップをしました。その中で、学校での英語、芸術、社会科、数学、情報関連の科目等の基準や全米学校図書館基準、全米のカリキュラムの基準などを参考にIFの基準をつくりました。また、この課題については前の学校でも取りかかっていた仕事のいくつかも参考にして、子どもたちに必要とされる技能や能力について考えてみました。そして、さまざまな情報源を寄せ集めて、いいところを取りあげて、子どもたちが学ぶべきインフォメーション・スキルの基準をつくっていったのです。

ですから私の考えるインフォメーション・スキルの定義は、情報源を見つけるよりもはるかに広い概念なのです。IFという概念に、リテラシーとインフォメーション・リテラシー、およびICT（テクノロジー）を結びつけ、それに批判的思考の概念を盛りこみました。

村上： ありがとうございます。ニューヨーク市教育庁のホーム・ページにあるIFの概念を見ますと、IFのあらゆる概念がILの概念と重なっているようにも思えます。ストリップリングさんのIFの定義はとても明確であるようにも思えますが、ILとIFのはっきりした違いがよく分かりません。具体的にIFとILの違いは何なのかを、もう少し詳しく教えて下さい。

ストリップリング： IFの概念とILの概念は違うものではありません。IFを習得することは、ILを習得することでもあるのです。私にとってIFは、ILのあらゆる概念を超えたものであり、IFを身につけることによって、子どもたちは単なる読み書き能力以上のものを学習するようになるのです。

例えば、ある子どもがペットを欲しがったとします。もしその子どもがペットの世話をする方法を知りたいのなら、インターネットなどで正しい情報を

探すべを知っているはず。私たちは、科学のプロジェクトをやっているときに、子どもたちに問題解決のスキルを教えているわけですからね。今度は、子どもたち自身が日々の生活の中でそのスキルを生かしていくのです。そして、必要があるときはいつでも、そういったスキルを実生活の中で応用することができるのです。こういったことがIFなのです。

そういったスキルを習得することが重要だと思う理由の1つは、子どもたちは情報化の波に放り出されているわけですから、優良サイトの中から情報を集め、情報を評価するすべを知らなければならないからです。そのため、授業の一環として子どもたちに情報収集や情報評価の方法を教えれば、子どもたちはあらゆる発達段階において、生活や将来の職業に関連したスキルを学ぶことができるのです。

例えば、休暇を取るとき、どういった情報をどのように取ればいいのか、どのように情報を評価すればいいのか、といったようなことです。これらのスキルを身につけることができれば、とりわけ将来の職業でも生かせるスキル、つまり、これからますます重要性を増してくる生涯学習のスキルを学ぶことにもなるのです。ですから、子どもたちには情報検索や情報評価などの方法を理解してもらいたいですね。

村上： ありがとうございます。単なる読み書き能力を身につけるだけではなく、それを身につけた上で、実生活や仕事などの中で、生涯にわたっていろいろと応用できるインフォメーション・スキルを身につけることがIFの基本的な考え方だということがよく分かりました。

さて次の質問に移ります。スクール・ライブラリアンの免許についてですが、ニューヨーク市の学校図書館で働いている人の多くはスクール・ライブラリアンの免許やメディア・スペシャリストの資格を持っているのでしょうか。

ストリップリング： 多くのスクール・ライブラリアンは、ライブラリアンの免許を持っていません。ニューヨーク州では、7年生以上の学校だけがライ

ブラリアンの免許を必要とします。中学・高校といった中等教育のレベルですね。でもこれは、州法にすぎません。ですから、小学校の図書館に勤めている人たちの多くは、ライブラリアンの免許を持っていません。もちろん、小学校の図書館に勤めている人たちは、小学校の教員免許は持っていますが、ライブラリアンやメディア・スペシャリストとしての免許を持っているというわけではないのです。

議論の1つとして言われることは、図書館で全く訓練を受けていない教職員の多くが学校図書館にはいるということです。でも、図書館に誰かしらライブラリアンと呼ばれる人がいなければ、子どもたちは質問する人がいなくなってしまう。

村上： ありがとうございます。初等教育のレベルでは、州法によって学校図書館で働く教職員には、スクール・ライブラリアンやメディア・スペシャリストの資格が要求されていないようです。しかし、ライブラリアンとして事前の訓練を受けていなかったとしても、学校図書館の現場で働く教職員の皆さんには、さまざまなところで専門性を身につける機会が提供されているということがよく分かりました。

次の質問に進みます。私たちは教師とライブラリアンやメディア・スペシャリストとのコラボレーション（協働）に興味を持っています。アメリカ学校図書館協会が中心となって編集した「Know It All」のビデオシリーズでも、ライブラリアンと教師、管理職、教育委員会、事務スタッフ、保護者等とのコラボレーションは重要な概念のひとつになっています。そこで質問ですが、ニューヨーク市では、教師とライブラリアンとのコラボレーションのために何らかの訓練をしていますか。

ストリップリング： ええ、やっていますよ。コラボレーションについて聞きたいと伺っていたので、資料を持ってきました。これが、協働授業（collaborative teaching）と協働学習（collaborative learning）についてのコピーです。ニューヨーク市では、ライブラリアンと教師がペアになって研修に参加させる時もあります。私たちは教師とライブラリアンの研修を一緒にすることに決めました。学校

に戻って、ライブラリアンと教師と一緒に授業をすすめる時もありますからね。

去年の夏、ライブラリアンと教師のペアのみなさんにお集まり頂いて共通の課題に取り組んで頂きました。研修期間は4日間です。研修の終わりにはペアごとに図書館を使って何を教えるべきかについての計画書を出してもらいました。つまり、子どもたちが自らの問いに答えるようにするために、図書館の情報源やメディアを使って何を、どのように教えていけばよいのか、についていろいろと話し合ってもらったのです。研修で学んだことを、夏の課外学習の一環として、子どもたちの探究学習の単位として進めていき、秋の新学期に備えました。

村上： 興味深い実践ですね。ところで、ストリップリングさんはライブラリアンと教師の間で、どのくらいの頻度で協働授業や協働学習が行われているかご存知ですか。

ストリップリング： 小学校のレベルでは、いわゆるクラスター・スケジュールの問題が挙げられます。つまり、ライブラリアンが通常のクラスに定期的に配属されるということを意味します。例えば、月曜日の3年生のクラスに、ライブラリアン・ティーチャーはこのクラス、次はこのクラスと自動的に受け持ちのクラスが決められているのです。

ですから、教員とライブラリアンと一緒に授業計画をすることはあまりありません。教師がライブラリアンを必要とするしなにかかわらず、これらの受け持ちのクラスは毎週同じ時間に定期的に入るからです。これは、ライブラリアンのあるべき姿ではありません。これは予算や教員の不足を補うために、ライブラリアンを含めた全ての教員に授業を担当してもらおうという発想ですね。

それでも、本当に良い小学校のライブラリアンは自分たちのためにクラスター・スケジュールをつくります。つまり子どもたちがその時点で何を勉強しているのかを把握するために、それを自分達の仕事とするのです。そして、子どもたちに簡単な宿題を課します。子どもたちが授業で何を学んでいるのかをライブラリアンが知ることによって、ライブラリア

ンと教員との接点つくっているのです。このように、ライブラリアンは、工夫によっては最も効果的な状況をつくりだすことができるのです。

ですから、教師が実際にライブラリアンと一緒に座って話をしなくても、良いライブラリアンは自分が何をしたらよいかがわかっています。これは、コラボレーション（協働）というよりはコーポレーション（協力）に近いですね。そして、子どもたちは、ライブラリアンが学びの過程にどのように関わってくれているのか、図書館にあるさまざまな情報源をどのように活用していけばよいのか、その方法について直感的に学んでいくのです。

村上： ありがとうございます。特に小学校の段階ではいろいろと配慮する問題があるようですね。ところでコラボレーションに関連した質問ですが、学校では保護者や管理職と一緒に何かを行うということがありますか。

ストリップリング： そうですね。協力的な校長、つまり支援をしてくれる校長がいなければ、良い図書館のプログラムを実践していくことは難しいですね。これは、とても重要なポイントです。ですから、ライブラリアンやティーチャー・ライブラリアンたちに強調していることは、自分たちが何をやっているのかということを経長に理解してもらうようにするということです。校長を巻き込んで、図書館で私たちが何をやっているのか、何を必要としているのかを他の教職員の方々にも知ってもらうのです。とても協力的な校長もいれば、そうではない校長もいます。通常このような違いは、校長が図書館について知らないからではなく、校長になるための経緯からおこるのです。

私たちは非常に若い校長を採用しますが、そういった校長の中にはたった3年間しか教えた経験がない校長もいます。校長を養成するための専門研究所もありますが、そこに入るための要件は、たった3年間の教育経験があればいいだけなのです。ですから、私たちも経験のない校長にどのように采配をふるってもらったらよいのかよく分からないのです。校長によっては、スケジュールを組み方も分かって

いません。もし良い校長に巡り会えば、ライブラリアンとしての能力を発揮することができます。ですから、何人かの校長を教育しなければならないライブラリアンも出てくるわけです。

私たちは、あらゆることを滞りなく行うために、柔軟なスケジュールを確保しなければなりません。精神的鍛錬のためにも、私は、一緒に働いている中でも最も難しい教師たちを首尾よく味方に引き入れたいという考えを持っています。でも、教師の100%の協力を得ることは、まずないでしょうね。

村上： ありがとうございます。3年の教育経験だけで校長になれるということは日本では考えられません。ニューヨーク市を含めたアメリカでは、校長のリーダーシップによって、学校運営が大きく変わるといふ現状があります。ですから、経験のあるライブラリアンが経験の少ない校長の教育をしたり、校長や他の教職員との意志疎通を図りながら、協働体制を築いていくことが重要なのですね。

それでは、具体的にライブラリアンや図書館とのコラボレーション、例えば学校図書館と公立図書館とのコラボレーションにはどのような事例が考えられますか。

ストリップリング： コラボレーションを推進するためにも私たちは公共図書館のライブラリアンたちと密な関係を築こうと思っています。私たちにはスクール・ライブラリアンの学会があり、そこで公共図書館のライブラリアンを招待して、ブック・トークや公共図書館のライブラリアンたちが行っている現場報告を聞きます。また、公共図書館のライブラリアンには夏の読書計画というプログラムもあり、スクール・ライブラリアンは公共図書館のライブラリアンたちから情報を得て、子どもたちにその催しを伝えています。

公共図書館のライブラリアンとスクール・ライブラリアンとの間には、非常に良い関係があります。ここに来る前のところでは、公共図書館のライブラリアンとスクール・ライブラリアンの間には競争に近いものがありました。しかし、ここニューヨーク市ではそんなものはありません。私たちはお互いに

協力し合っています。公共図書館のライブラリアンたちは子どもたちが勉強しているカリキュラムの内容について知りたがっているので、よくスクール・ライブラリアンたちと話をしますよ。

こういったコミュニケーションがなければ、公共図書館では同じような本を探している子どもたちをせき立てることになるでしょう。またライブラリアンとのコミュニケーションは、子どもたちの間で人気がある新刊書を選ぶのにも役立ちます。公共図書館のライブラリアンは、新刊書に関する知識が豊富ですから、スクール・ライブラリアンたちはそういった情報を自分たちのところにも引き出そうとします。私たちは、どちらのライブラリアンのグループにもそれぞれ長所があることを認めています。それらの長所は必ずしも同じである必要はなく、それぞれの長所を生かし短所を補い合いながら協力し合えばいいのです。

スクール・ライブラリアンの教育的役割については、まだまだ多くの人たちの理解を得られていません。公共図書館のライブラリアンは、スクール・ライブラリアンの持つ教育的役割を担っていません。公共図書館のライブラリアンはマンツーマンで教えたり、読み聞かせをしたりするかもしれませんが、どのようにウェブサイトを評価するのかは教えません。それは、私たちスクール・ライブラリアンが学校で教えることなのです。

これらの異なる図書館の違いを理解していない管理者が学校組織には散見されます。両方の図書館がうまく機能しているときは、お互いに敬意を表することでうまくいきます。幸いにも、ニューヨーク市では双方の関係は非常に良好です。公共図書館の数はとても多いのです。私たちは公共図書館のシステムを最大限に活用しようと考えています。例えばニューヨーク公共図書館では、2～3週間の間、10代の生徒たちのために本やブック・トークのための最新の推薦図書を提供しています。

公共図書館にはより多くの蔵書がありますが、どのような本を所蔵しているかという、それは子どもたちにとって必ずしもよい図書を所蔵しているというわけではないのです。むしろ学校図書館では、公共図書館では所蔵していないような良書を所蔵し

ているかもしれませんよ。

また、学校図書館は保護者と協力すれば協力するほど、状況がより良くなると思います。問題は、ほとんどの保護者が働いていることです。ですから、保護者の協力は日中の際は、ほとんど仰げないと思っていいでしょう。学校図書館は、保護者にとっても学校の中では最も良い場所だと思います。

保護者によっては、この国の学校がどのように運営されているのかわからない方もいますし、学校制度を知っていたとしても、良くない経験があったり、単に居心地の悪さを感じる保護者もいるでしょう。こういった保護者が子どもたちの教室に入ると、居心地の悪さはなおさらです。

とりわけ、子どもが問題を起しているなら、学校との接触はできれば本当に避けたいことでしょう。しかし、図書館ではだれも自分の子どもについて話す人はいませんから、ストレスはありません。保護者は、自由に図書館を探索することができますし、いつでも図書館にアクセスすることもできます。私たちはそういった仕組みをつくらなければなりません。

私たちには放課後に時間があります。その時間を利用して、教育的配慮を必要とする子どもが個人授業を受けていれば、保護者は図書館に来ることができます。このような実践は、「家族の読み書きガイド」と呼ばれており、私たちのウェブサイトで見ることができます。これは良書に関する保護者のためのガイドであり、8つの言語で対応しています。

村上： ありがとうございます。8つの言語で保護者を対象としたリテラシー対策をしているというのは、さまざまな国籍や民族が混在しているニューヨーク市ならではの取り組みですね。

さて、メディア・スペシャリストやスクール・ライブラリアンに関する質問に移りたいと思います。ストリップリングさんにとって、メディア・スペシャリストやスクール・ライブラリアンたちは、どのような資質を持つことが最も重要だとお考えでしょうか。

ストリップリング： まず第1に、メディア・ス

ペシャリストやスクール・ライブラリアンは、子どもが好きでなければなりませんね。子どもが好きではない方を雇いたいとは思いません。また、日常業務よりも自分が何をしたいのか、自分の将来はどうあるべきか、といった大きな目標に焦点を合わせることができる人材が必要だとも思います。読書や文学を愛する人材でなければならないとも思いますね。

いずれにせよ、個人的資質というのは重要だと思います。例えば、穏やかさ、ユーモアのセンス、柔軟性、自尊の感情や他人に対する敬意、卓越した交渉力といったものは、行政的役割や仲介者、またはグループを束ねたりする人材には必要不可欠な資質といえます。これらのスキルを磨いて、将来指導的な立場に立たなければならないからです。

個人的資質というのは、子どもたちにとっても重要だと思いますよ。このような資質を身につけることによって、良い聞き手にもなれますし、友好的にもなれます。子どもたちだけではなくて教師にとっても必要ですね。もし、教師の方に子どもたちを歓迎する気持ちがなかったら、子どもたちが図書館に来ることはないでしょうからね。こういった資質の多くは教えることができないスキルです。子どもをどうやって愛するのを教えることは難しいことですからね。

しかし、スクール・ライブラリアンである限りは、学校の教師よりはより良いコミュニケーションを図り、柔軟でなければなりません。スクール・ライブラリアンは学校のすべての教師たちと仕事をしなければならなりませんからね。つまり、スクール・ライブラリアンはどの教師とも、たとえそりが合わない人であっても、一緒に仕事ができるようであればなりません。これは難しいことですけどね。

村上： ありがとうございます。かなり時間が迫ってきましたので、これからは事実確認に近い質問になります。まずニューヨーク市の学校では、何人くらいのライブラリアンがいますか。また、ライブラリアンの資格を持つ資格者の占有率はどのくらいですか。

ストリップリング： ニューヨーク市には約1400

インタビュー

の学校がありますが、すべての学校が図書館を持っているわけではありません。幼稚園から高校までですと、約1200の図書館があります。そのほとんどの図書館にはライブラリアンがいますが、おそらく700ぐらいの学校のライブラリアンはライブラリアンの資格を持っていません。後の500のライブラリアンは資格を持っていると思いますが、詳しいところは分かりません。

村上： ありがとうございます。ライブラリアンの資格についてですが、ライブラリアンの資格は学部と修士のどちらで認可されていますか。

ストリップリング： 修士課程です。ライブラリアンになるには、図書館学の修士号がなければなりません。

村上： ありがとうございます。一般に小学校レベルでは、州法でスクール・ライブラリアンはライブラリアンの資格を必要としていないということですが、そうなる小学校レベルにおけるスクール・ライブラリアンの状況をどのようにお考えでしょうか。

ストリップリング： そうですね、小学校レベルのスクール・ライブラリアンは、同時に教師（ティーチャー・ライブラリアン）でもありますから、ライブラリアンの状況は他の教師と比べて悪くはありません。同じくらいでしょうね。

村上： ありがとうございます。最後になります。管理職として、ライブラリアンの地位や子どもたちの学力を向上させるのに、何が最も難しい問題だとお考えですか。

ストリップリング： 個人的には、私個人に直接結果が跳ね返ってこないということです。こういった現状があっても日々仕事を進めてゆき、ライブラリアンたちを訓練していかなければなりません。そして、ライブラリアンのみなさんは、やるべきことをやるわけです。

もし私自身が学校現場にいれば、何をどうすればうまくいくのかが分かります。しかし、いまはそういう状況ではありません。私はスクール・ライブラリアンたちが依拠するカリキュラムとその道具をつくっています。あとは、ライブラリアンのみなさん方を信頼するだけです。ライブラリアンが自分のやるべきことをやらない時は、私たちの全てがより少ない果実しか手にすることはないでしょう。いろいろとうまくいっている話を聞きますが、私はいつも縁の下の力持ちです。じかに子どもたちの生活の中に「違い」を与えるのを実感するのは難しいですからね。

村上： 今日はお忙しいところ、お時間を取って頂きありがとうございました。

本インタビューは、平成20年度科学研究費補助金基盤（B）、研究課題「国際文化探究学習のためのコミュニケーション・マネジメント・システムの研究」（研究代表者 坂本旬、課題番号19300286）の研究成果の一部である。